

解剖学		講義	教授 柳田 浩義	
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門基礎分野		科目ナンバリング	13311101

1. 授業のねらい・概要

医学の基礎である人体の構造を，マクロで観た人体の成り立ちや構造と，ミクロで観た各器官の成り立ちや構造の両方向から理解する。加えて，正常な器官の生理機能も学修する。

2. 授業の進め方

テキストの内容を，適宜，スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題などを出題し解答を出席カードに記載して提出させる。

3. 授業計画

1. 人体を構成する要素 人体の位置，方向，運動に関連する用語，体表から見た構造と名称について理解する。 細胞・組織の構造と機能，細胞小器官について理解を深める。 2. 体表からみる人体の構造 人体を構成する4つの組織（上皮組織・支持組織・筋組織・神経組織）について理解する。 3. 骨格系 骨に関係する組織などの役割・構造・機能について理解する。 4. 筋系 筋肉に関係する組織や器官の役割・構造・機能について理解する。 5. 循環器系 人の生命維持に不可欠な「循環器系」に属する臓器・構造・機能を理解し，呼吸系との関連性についても理解を深める。 6. 消化器系①（胃・小腸・大腸） 7. 消化器系②（肝・胆・膵） 人が日常活動するために必要なエネルギーを食物から得て，消化し分解する，「消化器系」に焦点を当て，属する臓器の構造・機能を理解する。	8. 呼吸器系 人の生命維持に不可欠な「呼吸器系」に属する臓器の構造・機能を理解する。 9. 泌尿器系 人体内で代謝され生じた老廃物を排泄する，「泌尿器系」に属する器官の構造・機能を理解する。 10. 生殖器系 「生殖器系」に属する器官の役割・構造・機能について理解する。 11. 内分泌系 内分泌の役割・構造・機能を理解する。また，ホルモンについても理解を深める。 12. 神経系 人の思考・感情や恒常性の維持を司る，「神経系」の構造・機能を理解し，重要性の理解を深める。 13. 感覚器系 「感覚器系」に属する器官の役割・構造・機能を理解する。 14. 血液系 血液に含まれている成分や機能について理解する。 15. 免疫系 免疫の役割・構造・機能について理解し，液性免疫と細胞性免疫の違いについても学修する。
---	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を，テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに，授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお，これらの準備学習には90分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回，過去に実施された国家試験などの問題を実践，解答させる。問題解答の際，また定期試験実施の際，解答のポイントおよび出題意図を試験終了後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

人体の構造と機能を理解する。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30％），定期試験（70％）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト：五味敏昭，岸 清編，解剖学 改訂3版，中外医学社，2018年

参考文献：小関一英編，2023年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022年
適宜指定する教材

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また，参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の3分の1（6回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

医学系授業の基礎となり，医療従事者であれば常に考え，身につけなければならない学習内容である。

本科目の単位を取得してからでないと，専門分野への履修申請を行うことができない科目がある。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

生理・心理機能測定法		実習	教授 大森 肇 教授 竹内 成生
科目カテゴリー	スポーツトレーナーコースの選択必修科目 柔道整復師コースの専門基礎科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	11301102 12312102 13312101

1. 授業のねらい・概要

スポーツを科学的に検証するためには、生理・心理の変化とパフォーマンスの関係性を捉える必要がある。一般に生理機能や心理機能の測定は難しいと考えられがちだが、測定の理論的背景を理解すれば、実際には明解かつ平易であることが理解できる。

本講義ではスポーツ科学研究、生理学研究、心理学研究といった複数の研究分野で多用される指標を題材として取り上げ、テーマごとに理論的背景、研究計画、測定方法、解析方法、データの見方までを取り扱う。一連の学習を通じて、科学的なデータの扱いや見方の基礎を習得することを目標とする。

2. 授業の進め方

教員2名による講義と実習形式によって進められる。講義ではパワーポイント、スライド、プリント、板書、視聴覚教材を適宜使用し、実習では学生が互いに実験者と被験者を体験する。また、各自データ処理を体験し、データの見方や結果に関する討議も行う。

3. 授業計画

1. ガイダンス：本講義の概要と評価法（両教員）	9. 生理学的研究の概略（大森：講義）
2. 心理学的研究の概略（竹内：講義）	10. 生理学的手法（大森：講義と実習）
3. 生理学的手法（竹内：講義と実習）	11. 生理学的計測（大森：実験）
4. 生理学的計測（竹内：実験・調査）	12. 生理学的解析①（大森：実習 [データ整理]）
5. 生理学的解析①（竹内：実習 [データ整理]）	13. 生理学的解析②（大森：実習 [データ解析]）
6. 生理学的解析②（竹内：実習 [データ解析]）	14. 生理学的考察（大森：講義と実習）
7. 生理学的考察（竹内：講義と実習）	15. まとめとフィードバック（大森：生理学領域）
8. まとめとフィードバック（竹内：心理学領域）	※実際の教員指導順序等の詳細は改めて告知する

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

講義はシラバスに則って進行するため、各講義前には予めテーマについて調べておくこと（1時間）。また、テーマ毎の簡単なレポートを必ず教員の指定する方法と期間に提出する必要がある（1時間）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

レポート提出後、質疑および要点等の解説を行う。

6. 授業における学修の到達目標

各テーマに関する教授と実際の実験を通じて、科学的なデータの扱いや見方の基礎を習得することを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

授業態度（20%）、積極性（30%）、各回の課題とレポート（50%）を基本として、総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

特に指定しない。参考図書は必要があれば授業中に適宜紹介し、プリントを配布することがある。

9. 受講上の留意事項

本講義では生理学・心理学的測定と解析をおこなうことから、測定機器を取り扱うことがある。測定機器は精密機械で

あること，ならびに人を対象として機器を操作することから，慎重かつ真面目な態度で受講すること。本講義を通じて，人間の生理機能と心理機能への理解とその面白さを体験してほしい。

本講義は夏期集中講義を予定しており，各自が実際に測定体験をすることが重要かつ評価対象ともなるため，前期当初のガイダンス夏季集中講義期間等の説明を実施する。なお，履修希望者が定員を超えた場合には抽選となる可能性があるため，希望者は必ず参加すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。竹内は障害を対象とした研究所における経験を踏まえて指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

運動生理学		講義	教授 大森 肇	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目、スポーツトレーナーコー スの選択必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科 目 教職科目 教職科目 教職科目	科目ナンバリング	11531202 12531202 13531107 11321204 12220207 13311102	

1. 授業のねらい・概要

運動生理学とは、運動時の身体応答とその機序を追究するとともに、そうした環境の変化に身体がどのように適応していくかを求めていく学問である。またその応用範囲は広く、スポーツパフォーマンスの向上、健康の維持・増進、疾病の予防・治療、幅広い年齢層への身体教育などに及んでいる。本授業では、特に運動に関係の深い身体機能に焦点を当て、基本となる構造・機能を学ぶとともに、上記の応用事例について考えていくことをねらいとしている。

2. 授業の進め方

パワーポイントによるプレゼンテーション、配布資料、板書等により授業を展開する。

3. 授業計画

1. ガイダンス 2. 運動生理学とは何か 3. 骨格筋の構造と機能 4. 神経系による運動の調節 5. 筋力と筋パワー 6. 筋の肥大と萎縮 7. 栄養素の消化・吸収と代謝 8. 運動時の代謝	9. 運動時のホルモン分泌 10. 運動と呼吸 11. 運動と循環 12. 運動時の疲労と生理的合目的性 13. 運動と酸化ストレス 14. 運動と抗疲労（休養・栄養・トレーニング） 15. まとめ
--	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各テーマについて予習し、理解のための基盤を作っておくこと（30分）。復習時に講義内容を改めて整理し、理解が不十分な部分は自ら調べを深め、疑問点を次回のショートレポートで質問できるようにまとめておくこと（30分）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回の授業冒頭において、前回のショートレポートで出された質問に答えることでフィードバックする。また、定期試験後に全体講評を掲示または一斉メールにてフィードバックする。

6. 授業における学修の到達目標

身体の基本的なメカニズムと運動時の変化に関する知識を身につけることを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験（70%）および受講態度（30%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

私語，水分補給以外の飲食，授業内容に関する検索以外のスマホ・PC 等の使用，居眠りの 4 項目を禁止する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツ栄養学		講義	非常勤講師 田口 郁美
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門選択科目、スポーツトレーナーコースの選択必修科目 柔道整復師コースの専門基礎科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	11321203 12312202 13311103

1. 授業のねらい・概要

運動と食事・栄養との関係，からだづくり，コンディションの維持，競技力向上のための栄養摂取について科学的理論に基づいた知識や食事のポイントを学ぶ。栄養素の体内代謝及び生理機能について理解を深め，アスリートの種目特性，年齢，性別，体調などを考慮した食事，栄養障害と食事対策，トレーニング期や試合期などの期分けによる食生活のあり方，食事管理などについて学ぶ。

2. 授業の進め方

配布資料を中心に，課題提出を含めて理解の程度を確認しながら講義を進める。

3. 授業計画

1. 講義概要説明	9. 目的別の食事 持久力と食事
2. スポーツと栄養 五大栄養素の役割	10. 時期，目的別区分と栄養・食事（合宿時）
3. 活動時の栄養素等摂取量	11. 時期，目的別区分と栄養・食事（試合期）
4. アスリートの栄養アセスメント	12. アスリートに多くみられる栄養障害
5. トレーニングと食事	13. 栄養補助食品(サプリメント)について
6. スポーツをする人の基本的な食事	14. 水分補給について
7. アスリートの栄養摂取と食生活	15. まとめ
8. 目的別の食事 からだ作り・減量	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

次回授業までに，参考文献，配布資料などによる予習・復習をして疑問点などを明確にしておく。

毎回1時間以上の準備学習（予習・復習）をして受講すること。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後，解答などを掲示板に掲示する。課題レポートの講評は講義の中で行う。

6. 授業における学修の到達目標

健康の維持・増進，からだづくり，コンディション維持，競技力向上のための食事など科学的理論に基づいた知識を習得するとともに，競技力向上の支えとなる食事の重要性を認識し，食事管理，栄養管理を実践できるようにする。

7. 成績評価の方法・基準

試験や提出レポートの結果（70%），授業や課題への取り組み（30%）によって総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

配付資料中心。

参考文献：公益財団法人 日本スポーツ協会 リファレンスブック

その他，必要に応じて講義の中で紹介する。

9. 受講上の留意事項

毎日の食事が心身の健康と密接に関係することを認識し，自らの食生活を充実させるよう努めること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無
該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連
上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

生体力学の基礎		講義	准教授 中川 剣人
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの選択必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	11301208 12220201 13312201

1. 授業のねらい・概要

力学とは、物体の運動とその物体に働く力を考察する学問である。メジャーを使って遠投距離を測る、体重計に乗って体重を量る、ストップウォッチを使ってスプリント走のタイムを計る—これらはすべてヒトの身体やパフォーマンスに対して物理量的指標を用いて評価を行うものであり、我々は日常的に、力学の概念に基づいた身体活動の観察や分析を行っている。本授業では、初等力学の初学者も対象に含めて、生体の運動やその力学的特性を論じるために必要となる数値表現および力学法則の基礎について学習を進める。また、「基礎運動学」で学習する内容とあわせて、発展的に「バイオメカニクス」を学習するための基礎を固める。

2. 授業の進め方

主にスライド呈示による講義形式で授業を進める。各回の内容にそって生体活動や身体動作を題材とした力学計算例題とその解答例を紹介する。毎回の授業中に小テストを実施し、理解度を測る。

3. 授業計画

1. ガイダンス 2. 単位・記号・文字・表記法 3. 座標・関数 4. スカラー・ベクトル 5. ベクトルの積 6. 変位・速度・加速度・躍度 7. 力と運動の法則 8. 自由落下と放物運動①（重力加速度）	9. 自由落下と放物運動②（斜方投射） 10. 角度・角速度・角加速度 11. エネルギー・仕事・パワー 12. 運動量・保存則 13. 剛体の運動・回転運動 14. 生体力学計算演習 15. 総復習
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前回までの授業ノートの見直しに1時間程度、また課題が出された場合はさらに1時間程度以上の準備学修を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

課題後、解答、要点等を解説し、フィードバックする。

6. 授業における学修の到達目標

基本的な数値表記法や力学概念を理解し、諸々の生体活動に対して妥当かつ正確な力学的説明を行えるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

受講態度と参加・活動状況（30%程度）、期末試験（70%程度）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

「スポーツバイオメカニクス」（宮西智久・岡田英孝・藤井範久：化学同人）を参考図書とする。

9. 受講上の留意事項

初等力学の初学者を想定した授業内容であるため、これまでの物理学や力学関連科目の学習状況は問わない。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、国立研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

バイオメカニクス		講義	准教授 中川 剣人	
科目カテゴリー	スポーツトレーナーコースの選択必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目 教職科目 教職科目 教職科目	科目ナンバリング	11301211 12220208 13312202 11532208 12532208 13532208	

1. 授業のねらい・概要

バイオメカニクスは、生体システムの構造と機能について力学や機構学の手法を用いて分析し、解釈を与えようとする学問領域であり、身体運動科学における主要な研究分野の1つである。具体的には、立位保持や歩行動作、またスポーツやリハビリテーションにおける諸々の生体活動を主要な研究対象とする。本授業では、身体動作におけるキネマティクスとキネティクスの基礎理論の学習を中心とし、特に運動中の生体や物体を力学的に説明・分析できることを目指す。履修にあたっては、先に「生体力学の基礎」を履修しておくことが望ましい。

2. 授業の進め方

主にスライド呈示による講義形式で授業を進める。各回の内容にそって生体活動や身体動作を題材とした力学計算例題とその解答例を紹介し、加えて身体部分慣性特性などの物理量を求める計算演習も実施する。毎回の授業中に小テストを実施し、理解度を測る。

3. 授業計画

1. ガイダンス	9. キネティクス④（保存則）
2. バイオメカニクスの対象・生体力学基礎①	10. キネティクス⑤（身体にかかる力）
3. 生体力学基礎②	11. キネティクス⑥（てこの原理）
4. キネマティクス①（位置と自由度／並進と回転）	12. キネティクス⑦（逆動力学）
5. キネマティクス①（3次元計測とその解析）	13. キネティクス⑧（現実場面でのキネティクス）
6. キネティクス①（身体部分慣性特性：重心）	14. バイオメカニクス研究トピック
7. キネティクス②（身体部分慣性特性：慣性モーメント）	15. 総復習
8. キネティクス③（力のモーメント・運動量・力積）	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前回までの授業ノートの見直しに1時間程度、また課題が出された場合はさらに1時間程度以上の準備学修を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

課題後、解答、要点等を解説し、フィードバックする。

6. 授業における学修の到達目標

バイオメカニクスの基本的な概念を理解し、生体活動や身体動作に対して力学的観点から説明できるようになる。

7. 成績評価の方法・基準

受講態度と参加・活動状況（30%程度）、期末試験（70%程度）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

特になし。

9. 受講上の留意事項

これまでの物理学や力学関連科目の学習状況は問わないが、先に「生体力学の基礎」を履修しておくことが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、国立研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツバイオメ カニクス測定法

2026年度

休講

知覚運動論		講義	准教授 中川 剣人	
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの選択必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	11301209 12220209 13312204	

1. 授業のねらい・概要

知覚は行為の手段であり、行為は知覚の手段である。知覚と行為（運動）は機能的に繋がっており、日常生活においてもスポーツ場面においても、これらを高度に連携させることが、効率的で合目的的な運動行動を遂行するために必要となる。本授業では、まず主に視覚系の感覚情報処理についての基礎理論を学び、さらに知覚運動に関わる学問領域の横断的な解説を交えながら、知覚と運動の機能的連携に対する理解を深めていく。また、実際の学術論文で示された結果を概覧しながら、過去から現在までの研究トピックに触れ、将来に向けたこの分野の展望を考察する。

2. 授業の進め方

主にスライド呈示による講義形式で授業を進める。話題にした現象や方法論についての体験的学習（実験）を盛り込みつつ、関連する学術論文を紹介しながら解説を行う。また、毎回の授業中に小テストを実施し、理解度を測る。

3. 授業計画

1. ガイダンス 2. 眼球光学系と神経生理 3. 光の強度と色覚 4. 視覚系の時空間特性／錯視 5. 運動視／知覚行為カップリング 6. 知覚運動行動に係る用語の解説 7. ミラーニューロン・運動伝染 8. 眼球運動／アスリートの視線	9. 高速移動物体の捕捉運動（野球を例に） 10. アスリートの立体視／動作遂行のための視覚情報 11. 注意と知覚運動 12. 【トピック】トップサッカー選手の知覚運動システム 13. 【トピック】トップ体操選手の知覚運動システム 14. 知覚運動に関わる脳領域徴 15. 総復習
--	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前回までの授業ノートの見直しに 30 分程度、また課題が出された場合はさらに 30 分程度以上の準備学修を要する。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

期末試験期間中の同時限内において、解答のポイントや出題の意図について全体説明を行い、個別質問にも応じる。

6. 授業における学修の到達目標

感覚系と運動系の情報処理過程について基本的な概念を理解し、アスリートの知覚運動システム、最新の研究の動向や研究手法について理解が深まる。

7. 成績評価の方法・基準

受講態度と参加・活動状況（30%程度）、期末試験（70%程度）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

特になし。

9. 受講上の留意事項

特になし。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、国立研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

動作解析学

2 0 2 6 年度

休講

運動制御論		講義	准教授 中川 剣人	
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの選択必修科目 教職科目 柔道整復師コースの教養選択科目 教職科目	科目ナンバリング	11301207 11532201 12220211 12532201	

1. 授業のねらい・概要

運動は、脳からの指令により脊髄運動ニューロンが活性化されることで、筋を収縮し、関節を中心に骨を動かし生じる随意運動と、主に筋や皮膚からの末梢入力、脊髄運動ニューロンを賦活させて生じる反射からなっており、これらのバランスを巧みに調節することで、目的にかなった動作を実現させている。その基本的な仕組みの理解はもちろん、アスリートの中枢神経系の特徴や運動学習に関する最近の知見に触れることで、教科書的な知見をスポーツや臨床場面と対応させて理解することを目指す。

2. 授業の進め方

パワーポイントによるプレゼンテーション形式、板書および、ビデオ映像等により授業を展開する。また、毎回の授業中に小テストを実施し、理解度を測る。

3. 授業計画

1. ガイダンス 2. 筋の種類、筋の構造と収縮メカニズム 3. 筋の力発揮の特徴、筋線維タイプ、運動単位 4. 脊髄と反射回路①（伸張反射） 5. 脊髄と反射回路②（反射の調節） 6. 反射運動その他 7. 大脳の構造と機能 8. 一次運動野の構造・機能	9. アスリートの一次運動野 10. 高次運動野の機能 11. 小脳の構造と機能 12. 小脳と運動学習 13. 大脳基底核の構造・機能 14. 眼球運動 15. 総復習
---	---

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

講義はシラバスに則って進行するため、各テーマについて予め疑問に思うこと、知りたいことを考察しておくこと（30分）。また、自筆ノートを見ながら講義内容に関して理解しているか否か確認し、疑問に思ったこと等を次回の講義で質問できるようにまとめ、覚えなければならない用語等は暗記すること（30分）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

課題後、解答、要点等を解説し、フィードバックする。

6. 授業における学修の到達目標

運動がどのように制御されているのか、その基礎知識と応用性を身につけることを目標とします。

7. 成績評価の方法・基準

受講態度と参加・活動状況（30%程度）、期末試験（70%程度）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

特になし。

9. 受講上の留意事項

自分が運動をどのようにコントロールしているか、その仕組みを理解しましょう。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業(講義)は、国立研究機関における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

生化学・微生物学		講義	教授 田中 基晴
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	13311201

1. 授業のねらい・概要

本科目は、救急救命士国家試験受験指定科目に設定されている。本授業では、生命現象を化学的に理解するために生化学と、感染症の原因となる微生物について学修する。

2. 授業の進め方

解剖学、生理学や病理学と同様に基礎医学分野の科目となるため、理解を深めるよう画像を使用した説明を行う。

3. 授業計画

1. 生化学序論 1) 生体の構成物質と細胞器官 2) 異化と同化 2. 生化学（生体エネルギーとは？） 生体の構成物質、細胞小器官及び生体エネルギー産生についての理解を深める。 3. 生化学（核酸、遺伝子の理解） 核酸、遺伝子の構造、機能についての理解を深める。 4. 生化学（たんぱく質代謝の理解） たんぱく質の種類、代謝経路とその障害についての理解を深める。 5. 生化学（糖質代謝の理解） 糖質の種類、代謝経路とその障害についての理解を深める。 6. 生化学（脂質代謝の理解） 脂質の種類、代謝経路とその障害についての理解を深める。 7. 生化学（ビタミン・ミネラルの理解） 各種ビタミン、ミネラルの機能についての理解を深める。 8. 生化学（内分泌系の理解） 個体の恒常性とその調節機能についての理解を深める。	9. 生化学（免疫、アレルギーの理解） 生体防御機能についての理解を深める。 10. 微生物序論 1) 微生物とは 2) 感染症の分類と感染防御機構 3) 感染防御機構の基礎 11. 微生物学（宿主の臓器・組織別にみる感染症と病原体についての理解）(I) 呼吸器感染症、結核、消化器感染症、肝炎についての理解を深める。 12. 微生物学（宿主の臓器・組織別にみる感染症と病原体についての理解）(I I) 尿路感染症、性感染症、皮膚・粘膜の感染症、脳・神経感染症についての理解を深める。 13. 微生物学（宿主の因子が影響する感染症と病原体についての理解を深める）(I) 人獣共通感染症、寄生虫感染症、小児の感染症、母子感染症、高齢者感染症、日和見感染症、移植患者、薬剤耐性菌についての理解を深める。 14. 微生物（感染・発症予防と行政の対応、検査・治療） ワクチン、感染症法、検査、治療方法についての理解を深める。 15. まとめ 生化学及び微生物に関する総復習
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

1) 予習（必要時間：約 50 分）

- a) 第1回の授業以外第2回から前週の授業で予習内容を伝える。教員は次回の授業に関して下記のイ)ーロ)に示す2項目を学生に提示する。

イ) 学習概要

ロ) 受講するにあたり必要な専門用語の説明

2) 復習（必要時間：40 分）

- a) 授業内容整理

各単元終了後に「まとめ」を提示して知識の確認を行うので、「まとめ」を十分理解、記憶するように復習する。

5. 課題（試験やレポート）に対するフィードバックの方法

1) 筆記試験

- a) 正解は貼りだす。
- b) 解説は、不正解問題を中心に行う。

6. 授業における学修の到達目標

救急救命士に必要な生化学、微生物学の基本的知識を身につけるとともに国家試験問題を解答・解説できるレベルへの到達を目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

1) 成績評価の基準

主に救急救命士に必要な生化学、微生物学の基本的知識の習得に関して、その到達度によって成績評価を行う。

2) 成績評価の方法

受講態度（出欠・遅刻・早退、スマホ閲覧、など）（30 %）。（スマホ閲覧を禁止しています）
筆記試験（70 %）。

8. テキスト・参考文献

テキスト：運動・からだ図鑑 生化学の基本：オールカラー 一條秀憲 マイナビ出版 2023 年

テキスト：ナーシング・グラフィカ 疾病と成り立ちと回復の促進③ 臨床微生物・医動物

テキスト：改訂第 11 版救急救命士標準テキスト

9. 受講上の留意事項

事前に高校の生物学を復習しておくこと。また、解剖生理学, 自然科学を学習しておくことが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。製薬会社における新薬開発の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

病理学概論		講義	教授 柳田 浩義
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門基礎分野	科目ナンバリング	13321101

1. 授業のねらい・概要

解剖学・生理学で学んだ知識を基に、各疾患の病態を学修し、救急救命士として臨床の現場で病理学的な知識を活かすことができるようにする。

2. 授業の進め方

テキストの内容を、適宜、スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題などを出題し解答を出席カードに記載して提出させる。

3. 授業計画

1. 病理学総論①（序，細胞・組織障害，再生と修復）	8. 病理学各論①（循環器系）
2. 病理学総論②（循環障害）	9. 病理学各論②（呼吸器系）
3. 病理学総論③（炎症，免疫とアレルギー）	10. 病理学各論③（消化器系）
4. 病理学総論④（感染症）	11. 病理学各論④（内分泌系）
5. 病理学総論⑤（代謝異常）	12. 病理学各論⑤（造血器系）
6. 病理学総論⑥（老化と老年病，腫瘍）	13. 病理学各論⑥（腎・尿路系）
7. 病理学総論⑦（新生児，先天異常，生命の危機）	14. 病理学各論⑦（生殖器・乳腺，運動器系）
	15. 病理学各論⑧（脳・神経系，感覚器系）

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を、テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに、授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお、これらの準備学習には90分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回、過去に実施された国家試験などの問題を実践，解答させる。問題解答の際，また定期試験実施の際，解答のポイントおよび出題意図を試験終了後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 授業で学修した医学・病理学用語の説明ができる。
- 2) 適切・的確な救急処置をおこなうため，各疾患の病態を正確に理解する。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%），定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト： 渡辺照男編，カラーで学べる病理学 第5版，スーヴェルヒロカワ，2019年

参考文献： 小関一英編，2023年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022年
適宜指定する教材

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また，参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子的着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の3分の1（6回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

医学系授業の基礎となり、医療従事者であれば常に考え、身につけなければならない学習内容である。
本科目の単位を取得してからでないと、専門分野への履修申請を行うことができない科目がある。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当あり。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

リハビリテーション論		講義	教授 大森 肇
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門 選択科目、スポーツトレーナーコー スの専門選択科目 教職科目 救急救命士コースの教養選択科目 柔道整復師コースの専門基礎科目 教職科目	科目ナンバリング	11322113 11531105 12531105 13220147 13531105 12312101

1. 授業のねらい・概要

本授業の内容は、「アスレティックリハビリテーションとトレーニング計画」、「コンディショニングの手法」、「特殊環境下での対応」の3項目が中心となる。「アスレティックリハビリテーションとトレーニング計画」では、一般人を対象とした社会復帰（リハビリ）だけではなく、スポーツ選手（アスリート）を対象としたリハビリ、すなわち達成目標として競技復帰までをマネジメントしていく方法論を学ぶ。「コンディショニングの手法」では、コンディショニングとは何かということを学ぶと同時に、ウォーミングアップ、クーリングダウンや患部以外の活用を含めた全身トレーニングについて学ぶ。「特殊環境下での対応」では、スポーツ活動の中でも身体負担度の大きな運動に対応する研究事例に触れることで、スポーツ選手のコンディション管理に関する知見を学ぶ。

2. 授業の進め方

パワーポイントによるプレゼンテーション、配布資料、板書等により授業を展開する。

3. 授業計画

1. ガイダンス	10. 患部以外の活用と全身トレーニング（筋力、持久力、スピード、協調性）
2. スポーツ外傷とスポーツ障害	11. 特殊環境下での対応（長時間走行による疲労とアミノ酸摂取による疲労軽減）
3. RICE 処理、アイシングの方法と効果	12. 特殊環境下での対応（高強度レジスタンス運動による筋痛・筋損傷に及ぼすアミノ酸摂取の効果）
4. メディカルリハビリテーションとアスレティックリハビリテーション	13. 特殊環境下での対応（高強度レジスタンス運動による筋痛・筋損傷に及ぼす事前運動の効果）
5. アスレティックリハビリテーション実施上の留意点	14. 特殊環境下での対応（動物の筋損傷モデル実験における熱ショックタンパク質の役割）
6. アスレティックリハビリテーションの段階的プログラム	15. まとめ
7. コンディショニングとは何か	
8. ウォーミングアップとクーリングダウン	
9. ストレッチングの目的・種類・方法	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各テーマについて予習し、理解のための基盤を作っておくこと（30分）。復習時に講義内容を改めて整理し、理解が不十分な部分は自ら調べを深め、疑問点を次のショートレポートで質問できるようにまとめておくこと（30分）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回の授業冒頭において、前回のショートレポートで出された質問に答えることでフィードバックする。また、定期試験後に全体講評を掲示または一斉メールにてフィードバックする。

6. 授業における学修の到達目標

運動で起こり得るダメージを理解し、その軽減法と予防法を学び、指導に活かせる知識を修得することを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験（70%）および受講態度（30%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

私語，水分補給以外の飲食，授業内容に関する検索以外のスマホ・PC 等の使用，居眠りの 4 項目を禁止する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

運動処方論		講義	教授 小笠原 正志
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの選択必修科目 柔道整復師コースの教養選択科目	科目ナンバリング	11301205 12220215

1. 授業のねらい・概要

人生百年時代を迎え、健康で長生きすることは本人の幸福だけではなく、社会全体の幸せにつながる。本講は、健康を脅かす大きな原因でもある生活習慣病を予防・改善する健康づくりのため、安全で効果的な運動を「運動処方」として提供するための基本的な仕組みを理解することを目的とする。運動は習慣化しなければ意味がない。運動による身体反応に関わる運動生理学・解剖学などの基礎科目の内容をふまえた上で、クライアントにとって運動が生活習慣のひとつとなるための教育的支援・環境的支援について学ぶ。

2. 授業の進め方

主に Power Point を用いたスライドおよび板書による講義形式で授業を行う。必要に応じて動画を教材として利用し、イラストを中心にわかりやすく編集された資料を補足的に用いる。また、各回に行う課題の実施により、講義の理解度を確認しながら展開していく。

3. 授業計画

1. ガイダンス・有酸素運動 無酸素運動とは 2. 運動強度の理解① エネルギー供給系 3. 運動強度の理解② 呼吸循環系 4. 運動強度の理解③ 運動強度の表し方 5. 運動と消費エネルギー・運動所要量 6. 生活習慣と生活習慣病の関連 7. 内臓脂肪型肥満と運動 8. 高血圧症と運動	9. 糖尿病と運動 10. 高尿酸血症・脂質異常症と運動 11. 筋力トレーニング 12. 高齢者と介護予防運動 13. 行動変容を促す技法 14. リスクマネジメント 15. まとめ
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の講義を受講するまでに、次週講義内容に関する情報を入手して予習し、講義内容を復習しておく。なお、これらの準備学習には1時間程度が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施の際、解答のポイントおよび出題意図を試験終了直後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

身体の特徴や機能ならびに運動処方に関する基礎知識を獲得し、自身の日常生活およびフィールドで実践・指導することができる。

7. 成績評価の方法・基準

講義への参加意欲ならびに各回の課題への取り組み状況（50%）、および期末レポート（50%）により総合的に評価する。ただし、講義回数の3分の1以上欠席した者は評価の対象としない。

8. テキスト・参考文献

小笠原正志：「健康生活とスポーツ」、SIS、2024

9. 受講上の留意事項

私語および携帯電話の使用、飲食、帽子の着用は禁止とする。トレーニングの科学的基礎等のトレーニング系講義を受講し、知識を習得していることが望ましい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、企業における実務経験（地域住民の運動指導）を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄記載の通り。

スポーツコンディショニングの理論と実際A		講義	准教授 牛島 詳力	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門選択科目、スポーツトレーナーコースの専門選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	11322119 12220156 13322103	

1. 授業のねらい・概要

「スポーツコンディショニング」という言葉には幅広い領域が含まれる。競技の大会に向けて身体の状態を調整するという目的を達成するには、選手の体調面でのコントロールといった直接的な要素だけでなく、練習やトレーニングを安全に行える環境づくりや、予期せぬアクシデントなどに対してどのように対応するかについての指針を示したエマージェンシーアクションプラン（EAP）の策定など、環境面やシステム面の整備がその鍵となる。

本授業では競技スポーツ指導の現場で、選手が本来もつ能力を最大に発揮するうえで必要となる、選手の安全を守るための知識をはじめ、環境や仕組みづくりといった要素それぞれがどのようにアスリートのコンディショニングに関わっていくかをより深く学習し、スポーツの指導に従事する者あるいは医療従事者としての基本的知識を身につける。

2. 授業の進め方

授業では配布資料と板書を活用する。

3. 授業計画

1. ガイダンス 「コンディショニング」とは、	9. EAP: 心肺停止に対する対応
2. スポーツコンディショニングに関係する資格・職種	10. EAP: 頭部外傷における対応
3. 関連各職種の理想的な連携・役割分担	11. EAP: 出血・外傷における対応
4. スポーツコンディショニングの長期計画	12. アスリートを守る環境づくり
5. スポーツコンディショニングの中期・短期計画	13. 暑熱環境下のコンディショニング
6. 外傷・障害からのリコンディショニング	14. 外傷の応急処置と再受傷予防（テーピング1）
7. アスリートを支えるシステムづくり	15. 外傷の応急処置と再受傷予防（テーピング2）
8. Emergency Action Plan（EAP）とは	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

自らが経験した競技スポーツあるいは国内または海外のプロスポーツや有名アスリートにおけるコンディショニングやそれにまつわる環境や仕組みについてつねに興味を持ち、それらに関するニュースを見聞した際には、自らのよく知る環境下ではどのように対処できるかについて思考を巡らせる習慣をもつ（翌週の講義までに1時間半程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

コメントシート（成績評価の方法・基準を参照）については次の講義時に受講者全員に対して、定期試験については正答と問題の要点を希望者に開示する。

6. 授業における学修の到達目標

スポーツ指導者あるいは医療従事者としてのスポーツコンディショニングに関しての基礎的な知識を身につける。

7. 成績評価の方法・基準

授業中の態度、提出物や定期試験での成績を総合して評価を行う。

定期試験（50%）＋コメントシート合計点（40%）＋平常点*（10%）＝総合（100%）

*平常点（授業参加点）：授業での発言、質問など、教員の主観も含まれる。

追再試験について：何らかの理由で定期試験が受けられなかった者に対して追試験を行うことがある、しかし成績不良者に対しての再試験は行わない。

8. テキスト・参考文献

テキスト： 特になし

参考文献：講義の際に紹介する

授業内容に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

毎回の授業時に配布されるコメントシートは必ず記入し提出すること。

講義回数の3分の1以上を欠席した場合は、定期試験の受験資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、接骨院やプロスポーツチームにおける実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツコンディショニングの理論と実際B		実習	准教授 牛島 詳力 講師 小向 啓介	
科目カテゴリ	スポーツトレーナーコースの専門選択科目 柔道整復師コースの教養選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	11302204 12220157 13322104	

1. 授業のねらい・概要

「スポーツコンディショニング」という言葉には幅広い領域が含まれる。競技の大会に向けて身体の状態を調整するという目的を達成するために、選手の体調面でのコントロールのうち、運動器外傷の予防を目的とした、各関節の可動域を確保するための筋・腱・関節に対しての第三者による介入、あるいは選手自身によるセルフケア、そして予期せぬ外力の影響による関節の不安定性をコントロールできるテーピングなどが広く一般的に用いられている。

本授業では競技スポーツ指導の現場で、選手が本来もつ能力を最大に発揮するうえで必要となる、可動域改善につながる徒手的な介入（スポーツマッサージやストレッチング）そして外傷の発生時に身体にかかるストレスを軽減させるテーピングなどがどのようにアスリートのコンディショニングに関わっていくかをより深く学習し、スポーツの指導に従事する者あるいは医療従事者としての基本的知識を身につける。

2. 授業の進め方

授業は基本的に実技指導が中心となる。講義の機会には配布資料と板書を活用する。

3. 授業計画

1. ガイダンス、選手のケアにおける Before & After	9. 中間実技試験
2. スポーツマッサージの基本（例：下腿部）	10. テーピングの理論・アンカーとブリッジ
3. 下肢・体幹部のスポーツマッサージ	11. フィギュアエイトとその応用
4. 上肢のスポーツマッサージ	12. 足関節のテーピング基礎
5. ストレッチングの基礎（例：ハムストリングス）	13. 足関節のテーピング応用
6. 下肢・体幹部のストレッチング	14. 特殊なテーピング
7. 上肢のストレッチング	15. テーピング各技術の応用と練習
8. 各技術の応用と練習	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各回の講義で紹介された実技については、常に復習すること（次の講義までに2時間程度）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

各実技試験では採点においての要点を総評として受講者全員に開示する。

6. 授業における学修の到達目標

スポーツ指導者あるいは医療従事者として、選手個人を対象にしたスポーツコンディショニングの各技術に関しての基礎的な知識を身につける。

7. 成績評価の方法・基準

授業中の態度、実技試験での成績を総合して評価を行う。

実技試験 2 回（90%）＋平常点*（10%）＝総合（100%）

*平常点（授業参加点）：授業での発言、質問など、教員の主観も含まれる。

追再試験について：何らかの理由で定期試験が受けられなかった者（追試験）に対して追試験を行うことがある、しかし成績不良者に対しての再試験は行わない。

8. テキスト・参考文献

テキスト： 特になし

授業内容に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

実技の内容によっては服装の指定がされることがある。該当する授業の前週での授業にて指示があるので常に従うこと。講義回数の3分の1以上を欠席した場合は、定期試験の受験資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、接骨院やプロスポーツチームにおける実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

スポーツ医学		講義	教授 大森 肇
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門基礎分野科目 柔道整復師コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	13321201 12311204

1. 授業のねらい・概要

スポーツ医学の応用性は幅広い。本授業では、その中でも生活習慣病等の予防・治療およびスポーツパフォーマンス向上の観点からスポーツ医学における諸問題に言及し、理解を深めることをねらいとする。

2. 授業の進め方

パワーポイントによるプレゼンテーション、配布資料、板書等により授業を展開する。

3. 授業計画

1. ガイダンス	10. 運動に伴う疲労の生理的合目的性
2. スポーツ医学とは何か	11. 長時間の高強度間欠的運動に伴う中枢疲労とそのメカニズム
3. 本授業におけるスポーツ医学の観点（疾病の予防・治療、スポーツパフォーマンスの向上）	12. 長時間走行時の筋痛・筋損傷・酸化ストレスの増加
4. 体力測定・健康・運動の関係	13. 長時間走行時の筋損傷とパフォーマンスの関係
5. 健康の維持・増進と運動処方	14. レジスタンストレーニングに伴う筋痛・筋損傷に及ぼす栄養摂取の効果
6. 生活習慣病	15. まとめ
7. 生活習慣病と運動療法	
8. 適度な運動による生理的・心理的ストレス軽減効果	
9. 加齢による認知機能の低下とストレスに及ぼす軽運動介入の効果	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各テーマについて予習し、理解のための基盤を作っておくこと（30分）。復習時に講義内容を改めて整理し、理解が不十分な部分は自ら調べを深め、疑問点を次のショートレポートで質問できるようにまとめておくこと（30分）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回の授業冒頭において、前回のショートレポートで出された質問に答えることでフィードバックする。また、定期試験後に全体講評を掲示または一斉メールにてフィードバックする。

6. 授業における学修の到達目標

基本的な身体構造・機能を理解し、生活習慣病等の予防・治療およびスポーツパフォーマンス向上の観点からスポーツ医学における諸問題に触れ、理解を深めることを目標にする。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験（70%）および受講態度（30%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

私語、水分補給以外の飲食、授業内容に関する検索以外のスマホ・PC等の使用、居眠りの4項目を禁止する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

ヘルスマネジメント		講義	非常勤講師 一戸 真子	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの選択必修科目、スポーツトレーナーコースの専門選択科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	11312201 13321202	

1. 授業のねらい・概要

健康を保持すること、健康増進に努めること、病気になっても負けない精神力を身につけることなど、「ヘルスマネジメント」能力は生きていく上で非常に重要であることについて学生が理解できるよう講義することを目的とする。また、私達人間は生物であり、動物でもあり、運動機能の発達は私達人間の生活を豊かにしてきたことを理解し、健康の保持・増進にとって重要な各機能や要素について学習し、ヘルスマネジメント能力の向上に必要な視点について理解を深められるよう講義する。

2. 授業の進め方

テキストの内容に沿った講義形式を基本とする。振り返りシートを活用して、理解を深められるよう工夫する。

3. 授業計画

1. 健康の定義：WHOの定義 2. 健康日本 21, 生活習慣病 3. ヘルスプロモーション, プライマリヘルスケア 4. ライフサイクルと健康 5. こころとからだの関係 6. 食と栄養と健康 7. 運動・スポーツと健康 8. 休養・睡眠と健康	9. 感染症, 非感染性疾患と健康 10. 行動変容, 遺伝要因と環境要因 11. アスリートの健康管理 12. スポーツによる精神障害と対策 13. ストレスマネジメント, ストレスコーピング 14. セルフケアの重要性 15. ヘルスマネジメント能力の向上に必要な要素
---	--

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

今回の授業テーマに関するテキストを読み込んでおくことと、各授業後に指示する課題についてまとめること。これらの予習・復習の時間には2時間以上必要とする。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後、解答などを掲示板に掲示する。

6. 授業における学修の到達目標

1. 健康の定義を理解し、栄養、運動、休養・睡眠の重要性について説明できる。
2. スポーツと人間の健康との関係について理解でき、アスリートの健康管理に重要な視点について説明できる。
3. ヘルスマネジメント能力の向上に必要な要因、およびセルフケアの重要性について説明できる。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験（60%）、レポート（40%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストは、山崎喜比古監修、朝倉隆司編（2021）『新・生き方としての健康科学（第二版）』有信堂高文社（ISBN 9784842065960）を使用するので、毎回の授業に必要となる。参考書は、『リファレンスブック』日本スポーツ協会、その他必要に応じてプリントを配布、参考書については必要に応じて講義時に紹介する。

9. 受講上の留意事項

本講義の受講をきっかけに、自らのヘルスマネジメント能力を向上させるよう積極的に受講して欲しい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、医療施設や福祉施設評価に関する実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

公衆衛生学		講義	教授 田中 基晴
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門基礎科目 教職科目	科目ナンバリング	13331201 13531203

1. 授業のねらい・概要

公衆衛生学は救急救命士国家試験を受験するに当たって履修必須の科目である。公衆衛生学は予防医学に位置づけられているが、予防のみならず、検診、リハビリテーションといった幅広い分野に亘って網羅する学問である。救急の現場では様々な原因で重篤な状態に陥った患者への即座の対応が必要になることも多いであろう。原因を推定し、正しい判断を行うことが求められる。そのような観点から身体に害となる物質や環境についての知識は重要であり、授業では健康状態に影響を及ぼす様々な微生物、薬物、環境等について学修する。

2. 授業の進め方

基本的には、教科書を中心に講義を進める。必要に応じて参考資料のプリントを配布する。

3. 授業計画

1. 公衆衛生学の歴史及び健康の概念	9. 老人保健
2. 感染症と予防	10. 精神保健
3. 食物と健康	11. 地域保健
4. 環境保健	12. 国際保健
5. 母子保健	13. 衛生行政と保健医療の制度
6. 学校保健・青少年の保健	14. 疫学
7. 産業保健	15. まとめ
8. 成人保健	

4. 準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

前回の講義内容を復習，理解し，前回の講義内容を復習，理解し，授業前に必ず一度は教科書の予定範囲を予習（1時間程度）として読んで，わからない点を把握しておくこと。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

筆記試験

- 正解は貼りだす。
- 解説は，不正解問題を中心に行う。

6. 授業における学習の到達目標

- 公衆衛生の概念，感染症，予防医学を理解する。
- 人の一生の前半期である妊娠，出産と，胎児，新生児，乳幼児，青少年，成人期，老年期，各期の健康と母子保健，学校保健について学び，理解する。
- 人の健康の維持増進，疾病予防を実践するために関わる環境因子を把握し，環境衛生を学ぶ。
- 疫学の歴史，概念について理解する。曝露と疾病，疾病頻度の指標を理解する。
- 各種の疫学研究方法を学び，理解する。

7. 成績評価の方法・基準

1) 基準

公衆衛生学について基礎的な理解ができているかを評価対象とする。

2) 方法

- 受講態度（出席，遅刻，早退，スマホ閲覧，など）(30%)。（スマホ閲覧を禁止しています）
- 筆記試験（小テストを含む）(70%)。

8. テキスト・参考文献

教科書： 衛生学・公衆衛生学 [改訂 第6版] 公益社団法人 全国柔道整復学校協会 監修, 鈴木庄亮, 小川正行ら著 南江堂 2021 年

9. 受講上の留意事項

あらかじめ、授業前に必ず一度は予定範囲を読んでおくこと。復習は、その日のうちに行うこと。また不明な点、理解できない点があれば遠慮しないで質問すること。

10. [実務経験のある教員等による授業科目]の該当の有無

該当する。本授業は、以下の実務経験を生かして実施する。製薬会社における新薬開発の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

学校保健論		講義	非常勤講師 新井 淑弘
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門選択科目、 スポーツトレーナーコースの専門選択科目 教職科目 柔道整復師コースの専門基礎科目 教職科目 救急救命士コースの専門基礎分野科目 教職科目	科目ナンバリング	11322206 11531204 12332203 12531204 13332201 13531204

1. 授業のねらい・概要

学校教育目標の具現化としての学校保健の位置づけを理解し、学校保健の実践が児童生徒の発達にどのような役割を担っているかを学ぶ。学校保健の意義と目的、行政と学校保健、法規に基づく学校保健の内容と組織、保健主事や養護教諭等の関係職員の役割などについて具体的な実践例をとおして学習する。

2. 授業の進め方

主に講義形式で授業を進めます。授業の始めに前回の振り返りを行った後に、今回の授業概要について説明を行う。授業内容によっては、調べ学習や、題学習等の形式でも授業を行う。授業の最後に次回の内容と準備についての説明を行う。

3. 授業計画

1. 学校保健の理念と目的、学校保健の構成	9. 学校保健活動の実際(小・中学校・高校・養護学校)
2. 学校保健計画と評価、学校保健と関係職員	10. 学校環境衛生とその評価および改善
3. 子どもの発育・発達と学校保健	11. 学校環境衛生の新たな課題
4. 学校における健康情報とその管理および利用	12. 学校災害と学校安全、セイフティープロモーション
5. 児童生徒の健康障害および伝染病の予防	13. 救急法と緊急時の体制
6. 健康障害のある児童生徒と学校生活	14. これからの教育環境と学校保健、海外の事例
7. 精神保健とがん教育	15. まとめ
8. 保健教育とヘルスプロモーション、組織活動	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

各授業の最後に次回のテーマに関連した課題を出すので、受講までに準備を行うこと。また、ノート提出を行い学習状況の確認を行うので、毎回の授業内容について復習を行いながら、ノートを整理しておくこと。(2時間程度を必要とする内容)

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後もしくはミニレポート提出後に、解答のポイント、出題意図等についての説明を行う。

6. 授業における学修の到達目標

学校保健・学校安全の目的・目標・活動の全体構成について理解し、各項目についての内容と実施について理解することを目標とする。

7. 成績評価の方法・基準

授業への貢献度・積極性、ミニレポートなどの平常点：20％、レポート・試験等 80％

8. テキスト・参考文献

教科書：①学校保健ハンドブック 教員養成系大学保健協議会(編) ぎょうせい
 ②学校保健マニュアル 衛藤隆也 南山堂

参考文献：授業の中で適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

授業後にミニレポートもしくはミニテストを行うことがあるので、毎回の授業のノートを作成して、予習や復習に活用すること。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当しない。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

保健医療福祉論		講義	非常勤講師 一戸 真子	
科目カテゴリー	スポーツマネジメントコースの専門選択科目、スポーツトレーナーコースの専門選択科目 柔道整復師コースの専門基礎科目 救急救命士コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	11322117 12331101 13332202	

1. 授業のねらい・概要

保健、医療、福祉・介護に関連した関係法規と制度の基礎知識や理論について講義する。保健・医療・福祉・介護各サービスの内容や技術について学ぶことは大切であるが、これらのサービスは、法律によって根拠づけられ、規制され、一定のルールのもとで役割分担されているということの重要さと必要性を学生が理解できるようになることを本講義の目的とする。さらに人々の QOL の向上には、保健・医療・福祉・介護の連携が大変重要であり、相互に関連性があることについても理解を深められるよう講義する。

2. 授業の進め方

テキストの内容に沿った講義形式を基本とする。振り返りシートを活用して、理解を深められるよう工夫する。

3. 授業計画

1. 保健・医療・福祉・介護各サービスの特徴	9. 健康増進法、予防の重要性
2. 憲法第 25 条と社会保障、医師法・各医療従事者法	10. 生活習慣病とがん対策
3. 医業と治療行為、医業類似行為	11. 患者の QOL とセルフケア
4. 医療法、健康保険法、介護保険法	12. 職種間の連携・チーム医療の重要性
5. 後期高齢者医療制度、障害者総合支援法	13. 障害者対策、難病対策
6. 診療報酬制度・介護報酬制度、公的扶助	14. 地域包括ケアシステム
7. 医療機能、病床機能、介護機能、在宅	15. 利用者中心の保健・医療・福祉・介護システムの構築と連携
8. サービス利用者の人権、自己決定・尊厳	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

今回の授業テーマに関するテキストを読み込んでおくことと、各授業後に指示する課題についてまとめておくこと。これらの予習・復習の時間には 2 時間以上必要とする。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験実施後、解答などを掲示板に掲示する。

6. 授業における学修の到達目標

1. 保健・医療・福祉・介護各サービスの特徴と制度の果たす役割について説明できる。
2. 保健、医療、福祉各関連法規および医療従事者各法について説明できる。
3. 保健医療福祉制度のあり方について説明でき、保健・医療・福祉・介護の連携の重要性について説明できる。

7. 成績評価の方法・基準

期末試験（60%）、レポート（40%）によって評価する。

8. テキスト・参考文献

テキストは、『保健医療福祉制度政策論』（2026）日本看護協会出版会（ISBN9784818029712）を使用するので、毎回の課題に必要である。その他必要な参考書等は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

保健・医療・福祉・介護に関する各法制度等を知っておくことは、今後患者や患者家族経験、要介護者や介護者を経験する際にも役立つことが多いので、関心を持って積極的に受講して欲しい。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、医療施設や福祉施設評価に関する実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

医療倫理学		講義	教授 柳田 浩義	
科目カテゴリー	柔道整復師コースの専門基礎科目 救命救急士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング	12331104 13332101	

1. 授業のねらい・概要

医療従事者として身に着けるべき医療倫理の原理・原則を理解すること，さらに医療倫理学がどのように医療現場で実践されるかについて，学修することを目的とした授業である。

2. 授業の進め方

テキストの内容を，適宜，スライドと配布資料を用いて授業する。授業の最後に最近の国家試験問題などを出題し解答を出席カードに記載して提出させる。適宜，論文や新聞・雑誌の記事などから具体的な出来事を取り上げて診療の現場に即した説明も行う。

3. 授業計画

1. 生命倫理学と医療倫理学の原理	9. 遺伝子・ゲノム医療・再生医療
2. 説明と同意	10. 感染症対策
3. 研究倫理	11. ケーススタディ①（他者危害の防止）
4. 人工妊娠中絶と出生前診断	12. ケーススタディ②（自己危害の防止）
5. 新生児医療における生命倫理	13. ケーススタディ③（尊厳死）
6. 脳死と臓器移植	14. ケーススタディ④（障害児の出生）
7. 終末期医療・安楽死と尊厳死	15. ケーススタディ⑤（医療資源化の是非）
8. 救急医療における倫理	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

毎回の授業を受講するまでに前回の授業内容を，テキストと配布資料を使って復習しておく。さらに，授業の最後に出された問題を復習しておく。この問題は次回の授業の初めに解答を解説する。なお，これらの準備学習には90分以上が必要である。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

毎回，過去に実施された国家試験などの問題を実践，解答させる。問題解答の際，また定期試験実施の際，解答のポイントおよび出題意図を試験終了後に説明する。

6. 授業における学修の到達目標

- 1) 倫理と道徳の相違を理解する。倫理に関して各自の考えをしっかりと構築する。
- 2) 医療倫理の実地において最も重要なコミュニケーションについての理解を深める。
- 3) 医療倫理が柔道整復師，救急救命士の現場でどのように生かされるかについて理解する。

7. 成績評価の方法・基準

平常点（30%），定期試験（70%）を総合的に評価する。

8. テキスト・参考文献

テキスト：伏木信次編，生命倫理と医療倫理 第4版，金芳堂，2020年

参考文献：明治東洋医学院編集委員会編，2024 第22回～第31回 徹底攻略！国家試験過去問題集 柔道整復師用，医学の日本社，2023年

小関一英編，2023年版救急救命士国家試験対策出題分野別国試験問題・解説集，晴れ書房，2022年
適宜指定する教材

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また，参考文献は適宜紹介する。

9. 受講上の留意事項

携帯電話の使用，飲食，帽子の着用は禁止とする。

欠席回数が全講義回数の3分の1（6回）以上となった場合には受験資格を失う。

遅刻，欠席ならびに授業中の私語，許可の無い教室の出入り，授業に関係ない言動は慎むこと。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。医療機関における医師としての実務経験を活かして講義を行う。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

関係法規		講義	非常勤講師 西川 晃子
科目カテゴリ	柔道整復師コースの専門基礎科目	科目ナンバリング	12331401

1. 授業のねらい・概要

人が社会の中で生きていくためには、法律に従わないといけない。人間の生命に関わることであれば、さらに注意しなければならない。「法律を学ぶ」とは、物事の判断基準であり、柔道整復師の活動が他人に対して不利益にならぬようにするためのものである。その為には、内容の理解が必要不可欠となる。

本授業では法の意義や体系、柔道整復師免許、業務、施術所、他の医療従事者など様々な法律について学習し、職務に就いた際、活動を正しく円滑に行えることを目的に行う。

2. 授業の進め方

授業では配布資料とスライドを活用する。

3. 授業計画

1. ガイダンス 総則	10. 医療従事者の資格法（医師法、歯科医師法、保健師助産師看護師法、診療放射線技師法など）
2. 免許	11. 医療従事者の資格法（理学療法士および作業療法士法、義肢装具士法、薬剤師法など）
3. 柔道整復師国家試験	12. 医療法
4. 業務	13. 医療法施行令
5. 施術所	14. 社会福祉関係法規
6. 雑側	15. 社会保険関係法規
7. 罰則	
8. 指定登録機関及び指定試験期間	
9. 附則	

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

事前に配布した資料に目を通し、わからない単語があれば事前に調べておくこと（およそ 30 分間）。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

定期試験の正答と問題の要点を希望者に配布する。

6. 授業における学修の到達目標

「関係法規」の必要性を確認する。

法律の意味を理解する。

柔道整復師に関する法律ならびに国家試験に対応した知識を身につける。

7. 成績評価の方法・基準

定期試験（期末試験）の結果のみ（100%）により評価する。

8. テキスト・参考文献

全国柔道整復学校協会 監修、『関係法規 2026 年版』、医歯薬出版、2026 年

その他、授業内容に応じて資料を配布する。

9. 受講上の留意事項

授業開始 5 分前には着席しておくこと。

講義回数の 3 分の 1 以上を欠席した場合は、定期試験の受験資格を失うこととする。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当の有無

該当する。本授業は、接骨院における実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。

救急医療行政		講義	教授 千明 政好	
科目カテゴリー	救急救命士コースの専門基礎分野科目	科目ナンバリング		133301

1. 授業のねらい・概要

本授業は、社会保障・社会福祉と医療体制、地域の医療や救急体制などの仕組み・問題点・課題点の理解を深めるとともに、救急救命士としての関わりを探究する。

2. 授業の進め方

テキストに加え、授業内容に沿った動画や資料を活用して説明を行うとともに、グループワークなどのアクティブラーニングによる授業展開を行う。

3. 授業計画

回	授業内容	授業形態	担当
1	社会保障・社会福祉の概要わが国の社会保障・社会福祉の概要を把握する。	講義	千明政好
2	社会保障とその仕組み わが国の社会保障とその理念、社会保障制度、社会保障給付費の現状・将来の見通し等について理解を深める。	講義	千明
3	社会保険制度 わが国の医療保険制度、介護保険制度、年金保険制度について理解を深める。	講義	千明
4	社会福祉と公的扶助（国家扶助） わが国の社会福祉の仕組みと「国家扶助」について理解を深める。	講義	千明
5	社会福祉と公的扶助（児童福祉） わが国の社会福祉の仕組みと「児童福祉」について理解を深める。	講義	千明
6	社会福祉と公的扶助（高齢者福祉・障害者福祉） わが国の社会福祉の仕組みと「高齢者福祉」・「障害者福祉」について理解を深める。	講義	千明
7	医療行政（医療供給体制）（医療機関） わが国の医療供給体制、医療機関の仕組みと現状・将来の見通しについて理解を深める。	講義	千明
8	医療行政（救急医療） わが国の「救急医療」についての理解を深める。 小試験①	講義	千明
9	医療行政（災害医療） 医療計画の一つである「災害医療」についての理解を深める。	講義	千明
10	医療行政（へき地医療・周産期医療・精神科医療）（地域医療構想） 医療計画の一つである「へき地医療」・「周産期医療」・「精神科医療」「地域医療構想」についての理解を深める。	講義	千明
11	医療行政（群馬県における現状と課題） 群馬県や近隣各県における医療行政や少子高齢化対策の現状と課題についてまとめと発表を行い、理解を深める。	演習	千明
12	医療行政（国内各地域の現状と課題） 指示する国内各地域における医療行政や少子高齢化対策の現状と課題についてまとめと発表を行い、理解を深める。	演習	千明
13	医療行政（国内各地域の現状と課題） 指示する国内各地域における医療行政や少子高齢化対策の現状と課題についてまとめと発表を行い、理解を深める。	演習	千明
14	医療行政（国内各地域の現状と課題） 指示する国内各地域における医療行政や少子高齢化対策の現状と課題についてまとめと発表を行い、理解を深める。	演習	千明

15	一連の授業の総括とまとめと小試験②	講義	千明
----	-------------------	----	----

4. 準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- 1) 予習（必要時間：約 60 分）
授業計画を参考に、該当授業箇所について予習すること。
- 2) 復習（必要時間：約 60 分）
テキストの授業該当箇所と配布資料などをもとに復習し理解を深めること。

5. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

- ・筆記試験 小試験 2 回，期末試験 1 回，各試験実施直後に解答と解説を行う。
- ・課題 毎回授業の初めに 15 分程度の予習を課す。すべての項目を記入し提出すること。授業中に内容を説明する。

6. 授業における学修の到達目標

わが国の社会保障・社会福祉と医療体制の仕組み・問題点・課題点について正しく理解できる。また、その問題点・課題点に対して救急救命士がいかに関わるべきかについて、探求し続ける資質を身に付けることができる。

7. 成績評価の方法・基準

- 1) 小試験 2 回（50％）本試験（50％）により成績評価を行う。
- 2) 合計点数の 60％以上を合格とする。
- 3) 再試験は実施しない。
受験資格として 3 分の 2 以上の出席かつ、全ての課題が提出されている事

8. テキスト・参考文献

救急救命士標準テキスト編集委員会：改訂第 11 版 救急救命士標準テキスト（へるす出版）2025.

JPTEC 協議会編著：改訂第 2 版補訂版 JPTEC ガイドブック（へるす出版）2022.

適宜指定する教材

9. 受講上の留意事項

授業時間中はスマートフォン使用禁止，イヤホン使用禁止，帽子着用禁止とする。従わない場合は退室させ欠席扱いとする。授業中にもかかわらず学生同士の会話等がひどい場合は授業妨害と判断し退室させ欠席扱いとする。

テキストは毎回の授業に必ず持参すること。また，参考文献は適宜紹介する。

10. 「実務経験のある教員等による授業科目」の該当有無

該当する。本授業は，大学病院救命救急センターや集中治療室等における 20 年以上の実務経験を活かして指導する。

11. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

上記の「科目カテゴリー」欄の記載のとおり。